

初等・中等教育段階の活動経験の豊かさが 大学生の職業進路成熟に与える影響 ——キャリア教育を広義に捉えた実証的研究——

望月 由起 リクルートワークス研究所・客員研究員

本研究では、広義のキャリア教育の実証として、初等・中等教育段階での活動経験が大学生の職業進路成熟に及ぼす影響を長期的なスパンで捉えた。その結果、初等教育段階での「学校行事」や中等教育段階での「教科学習」経験の豊かさが、大学生の職業進路成熟に強く影響する点や、大学生の職業進路成熟に影響する活動には性差もあり、男子は「現在（日常）」、女子は「将来」にかかわる活動である傾向がある点などを明らかにした。

キーワード： 初等・中等教育, 活動経験, キャリア教育, 職業進路成熟, 大学生

目次

I. はじめに

I-1. 本研究の目的

I-2. 分析課題の設定

II. 調査の概要

III. 結果

III-1. 大学生の職業進路成熟傾向

III-2. 小学校・中学校・高校での諸活動経験

III-3. 大学生の職業進路成熟と小学校・中学校・高校での「キャリア教育」経験の豊かさの関連

III-4. 大学生の職業進路成熟と関連する小学校・中学校・高校での活動類型

III-5. 大学生の職業進路成熟に影響のある活動

IV. 考察

V. おわりに

I. はじめに

I-1. 本研究の目的

日本社会では長きに渡り、「高い学歴（学校歴）があれば、一流企業に採用されたり、社会的に威信の高い職業に就くことができる」といったキャリア観がまかり通ってきた。したがって、「働くことを通して社会的にも一人前になる」といった概

念は、理念的に論じられ、重要な社会的課題であると認識されていたものの、日本の教育システムのもとでは、「仕事」や「働くこと」について理解を深めるような体系的教育はなされておらず、「いかにキャリアを形成していくか」といった課題を学習項目として教え伝えていくことや、職業選択に対する指導や介入の方策が十分ではなかった。

しかし1990年代に入ると、バブル経済の崩壊や情報化社会・国際化社会の到来など、社会構造や制度、雇用を取り巻く社会環境が大きく変化し、「将来のキャリア形成＝学歴（学校歴）形成」といった観念がゆらぎはじめた。結果として、若者の職業選択行動にも変化がみられ、早期離職者・学卒無業者・フリーター・ニートの増加は、社会問題へと発展した。

こうした状況を背景に、青少年の職業観・勤労観を育成すべく、学校におけるキャリア教育の必要性が叫ばれることとなった。キャリア教育そのものは、社会的・経済的状況における青少年の失業率の悪化や青少年の職業発達上の問題などを背景に、1970年代にアメリカで提唱されたものであるが、日本の進路指導の改善・充実にも少なからず影響を与えてきたものである。しかし、キャリア教育という文言が、文部科学行政関連の審議会

報告等で初めて登場したのは、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（1999）でのことである。この答申では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業観に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」とした上で、小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があると提言している。この答申を受けて2002年に発足した「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」が2004年にまとめた報告書においても、キャリア教育により、各学校段階内での進路指導という従来の枠組みを越え、学校制度全体として、青少年の発達段階に応じたキャリア形成にあたることを求めている。

以降、キャリア教育への取り組みは積極的に展開されている。しかし、日本におけるキャリア教育は、その概念が実践の場を導入された段階にすぎず、多くの課題が指摘されているのも事実である。またキャリア教育は、教育現場からの要望に基づくボトムアップ型の取り組みではなく、行政主導の形でトップダウン式におりてきたものであるためか、教育現場では、その意義・目的・必要性などの理解が必ずしも浸透しておらず、困惑や抽象的・形式的理解、批判や反発さえ生じている。渡部（2007）によれば、先進校の実施例をみると、その準備や調整の手間たるや、非常に大変なものがあり、「その手間に見合うだけの効果があるのか」「仮に効果があったとしても、うちの学校ではできない」と多くの教育現場では、キャリア教育を認識しているという。

こうした状況をふまえ、キャリア教育に対する課題の中でも、本研究では以下の3点に着目する。

第1は、「キャリア教育をきわめて狭義にとらえており、日本の学校教育がかねてより有する潤沢な教育資源を活用した、広義のキャリア教育への視点が軽視されている」という点である。

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（2004）において、「従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革していくための理

念と方向性を示すもの」と示しているように、そもそもキャリア教育は、特別なカリキュラムやプログラムを取り入れるような、学校教育に新たに加えられた教育課題ではない。キャリア教育として意識したり、明確な位置づけはせずとも、日本の学校教育の中には、青少年のキャリア形成に潜在的に働きかけるような活動が少なからず存在しているだろう。

キャリア教育で求められているものは、こうした教育資源・活動を見直し、意味づけをし直すことを通して、改善していくことではなかろうか。児美川（2007）も述べるように、キャリア教育とは、子どもたちの学校卒業後の社会生活や職業生活との関連性を意識した視点から、学校の教育課程全体を点検し、必要な編み直しを行っていく営みである。三村（2008）は小学校のキャリア教育に対し、これまでの教育実践を丹念に見直し、「進路」の視点で教育を組織的、系統的な方向へと構造改革を図ることの重要性を指摘しているが、こうした指摘は小学校に限らず、いずれの学校段階に対してもいえるだろう。児美川（2007）も指摘するように、「キャリア教育に取り組んでいる」ということ自体が、特段に強調されたり、キャリア教育にかかわる華やかな行事や体験活動だけが目立って注目を集めたり、学校の「特色づくり」や生徒募集上の「魅力」として、キャリア教育への取り組みが宣伝されたりするといったことも、本末転倒であることが認識されなければなるまい。

キャリア教育に対する、以上のような誤認をとくためにも、キャリア教育として新たにカリキュラム化・プログラム化された活動ではないものの、それぞれの学校の教育資源を活かし、青少年のキャリア形成に有益である事例を掘り起こしていくことが必要である。教育現場からの理解や実践ひとつひとつに対する自信を深めるためにも、キャリア教育を広義にとらえ、日本の学校教育が有する潤沢な教育資源を活用したキャリア教育のあり方を広め、浸透させていかなばなるまい。

第2は、「キャリア教育の効果を、きわめて短期的なスパンでしか捉えていない」という点であ

る。1999年の中教審答申でも示されているように、学校教育の職業的レリバンスは、小学校段階からの学校制度全体の問題である。しかし、キャリア教育研究の多くは、特定の学校段階に焦点をあて、働きかけを行った直後、長くともその学校段階内といった短期的なスパンで教育効果を示したものである。高等教育への進学が大衆化している現在、キャリア教育の教育効果について、高等教育段階までを視野に入れ、長期的スパンから逆算的に捉えることも必要ではなかろうか。

第3は、「キャリア教育に対する実証が不足している」という点である。現在のキャリア教育は、ある種のブームとして、その効果を十分に検証することなく、実施のみが急速に広がっているのではないかと懸念される。荻谷(1991)は、「教育に関する議論の暗黙の前提となる『当為としての教育(真の教育)』という価値基準は、抽象的なレベルに留まる限り、異論のないものである」と述べた上で、「その価値をどう実現するか、抽象的な目標を具体的なレベルにどのように引き下ろすかとなると、そこにはさまざまな議論が成り立ちうる」と指摘している。望月(2007: 6)は、「進路指導をめぐる議論の多くが、『どうあらねばならないのか』という理想論にとどまり、個々の感覚的・情緒的論拠に基づいて概念的に語られているように思われる」と指摘するが、キャリア教育をめぐる議論に関しても同様のことが言えるのではなかろうか。キャリア教育という概念の目新しさを印象づけることが先行し、その効果や課題を確認するのに十分なデータは提示されていないのが現状である。キャリア教育を広義に捉える意義についての議論にしても、経験則に基づく議論という感が否めず、実証的な検証はなされていない。こうした点は、研究レベルでも同様であり、キャリア教育研究の実証的な検証不足が指摘されている(たとえば杉山 2007; 松高 2008)。

キャリア教育が、今後も実体のあるものとして定着していくためには、その課題も含めて、ひとつひとつ丁寧に実証していく必要があるだろう。トップダウン式に「べき論」から概念的に論じる

のみならず、ボトムアップ式に実証・検討を重ねていかねば、キャリア教育は一時の流行に終わり、やがて形骸化していくのではなかろうか。

なお、本研究では、アウトプットとして「進路成熟 (career maturity)」に着目していく。進路成熟に関する理論化は、1970年代のアメリカにおけるキャリアエデュケーションの実践の基底をなしているものであり、キャリア意識と称される広範な概念の中で、「キャリア発達という概念に『進歩的变化』を含めた概念 (Crites 1973)」「キャリア発達課題に取り組もうとする個人の態度的・認知的レディネス¹ (Super 1984)」を意味するものである。職業的発達、職業的成熟、進路発達の諸概念を包括した概念であり、進路選択・意思決定やその後の適応への個人的レディネスを測定・評価する目的で使用されることが多く(坂柳 1991)、「大学生の進路決定・未決定を規定する職業への準備の状態(東 2003: 126)」をあらわす概念でもある。教育や支援といった人為的な働きかけにより、進歩的な変化が期待されるものであり、進路指導やキャリア教育がその達成を目指している概念であることより、進路成熟は、本研究で着目するアウトプットとして適切であると思われる。

進路成熟が児童・生徒の活動経験に影響を受けることは、かねてより指摘されている(たとえば、竹内・坂柳 1977; 那須 1992)。しかし、いずれもさまざまな学校段階にわたる長期的なスパンでの縦断的考察ではない。

以上の点をふまえ、本研究では、広義のキャリア教育の実証的な検証として、初等・中等教育段階における活動経験が大学生の職業進路成熟に及ぼす影響について、学校制度全体として長期的なスパンで明らかにすることを試みる。大学生の中でも、自己の現実的な進路として「就職」に歩み始めた3年生の初等・中等教育段階の活動経験に着目し、それが彼らの職業進路成熟に与える影響について実証的なデータを示していく。

その結果に基づき、初等・中等教育段階の教育現場に対する臨床的なインプリケーションを付与するとともに、その背景にある理論的な検討を行

うための仮説の提示を行うこととする。

I-2. 分析課題の設定

本研究では、調査対象者である大学生の職業進路成熟傾向および初等・中等教育段階での諸活動経験を確認した上で、以下の2つの分析課題について調査・分析を行うこととする。

第1の課題は、「小学校・中学校・高校の『キャリア教育』経験の豊かさは、大学生の職業進路成熟といかなる相関があるのか」を明らかにすることである。本研究では、「仕事や職業に関する授業（以降、「キャリア授業」とする）」および「インターンシップ（職場体験）」を新たなカリキュラム・プログラムに基づく狭義の「キャリア教育」とみなし、その経験の豊かさと大学生の職業進路成熟との関連を長期的なスパンでみていく。その結果に基づき、狭義の「キャリア教育」の影響について捉えることとする。

第2の課題は、キャリア教育を広義にとらえ、「小学校・中学校・高校における諸活動経験の豊かさは、大学生の職業進路成熟といかなる関連があるのか」を明らかにすることである。「初等・中等教育段階の活動経験の豊かさと、大学生の職業進路成熟との相関」を活動類型ごとに概観した上で、「小学校から高校までを通して、さらには、学校段階ごとにみて、大学生の職業進路成熟に影響力のある活動は、具体的にはどのような活動なのか」といった点を明らかにしていく。その結果に基づき、大学生の職業進路成熟に影響力のある活動を掘り起こし、各学校段階でキャリアの視点から見直すべき活動を示すこととする。

なお本研究では、大学生の性別に着目し、分析結果の性差についても言及していく。

II. 調査の概要

- ・実施時期：平成20年10月下旬～11月上旬
- ・方法：インターネットを利用したWeb調査²。プレ調査により対象者を選定し、本調査を実

施した。

- ・分析対象者：大学卒業後に、就職することを希望している4年制大学の3年生819名³。
内訳は、男子337名、女子482名である。

・分析項目：

1) 小学校・中学校・高校での活動経験

小学校・中学校・高校での活動経験に関する予備調査⁴に基づき、「キャリア教育」「教科学習」「特別活動」「課外活動」「交友活動」の5つの類型を抽出し、それぞれに関する活動を以下のように具体的に設定した。

- ・キャリア教育：キャリア授業・インターンシップ（職場体験）
- ・教科学習：授業の予習・授業の復習・受験勉強
- ・特別活動：部活動（クラブ活動）・生徒会（児童会）や委員会活動・学校行事
- ・課外活動：習い事（学習塾除く）・趣味・ボランティア・アルバイト（高校段階のみ）
- ・交友活動：同じ学校段階の友人との交友・異なる学校段階の友人との交友・恋愛

各活動の経験の豊かさについて、4段階評価（4-かなり取り組んだ（経験した）、1-まったく取り組まなかった（経験しなかった））+「覚えていない」の5つの選択肢から1つ回答を求めた。

2) 職業進路成熟

坂柳（1992, 1993）による進路成熟測定尺度のうち、職業進路成熟（主に、職業選択への取り組み姿勢）に関する15項目を用いた⁵。各項目とも、5段階評定（5-よくあてはまる、1-まったくあてはまらない）での回答を求め、5点から1点までのスコア化ができるようになっている。

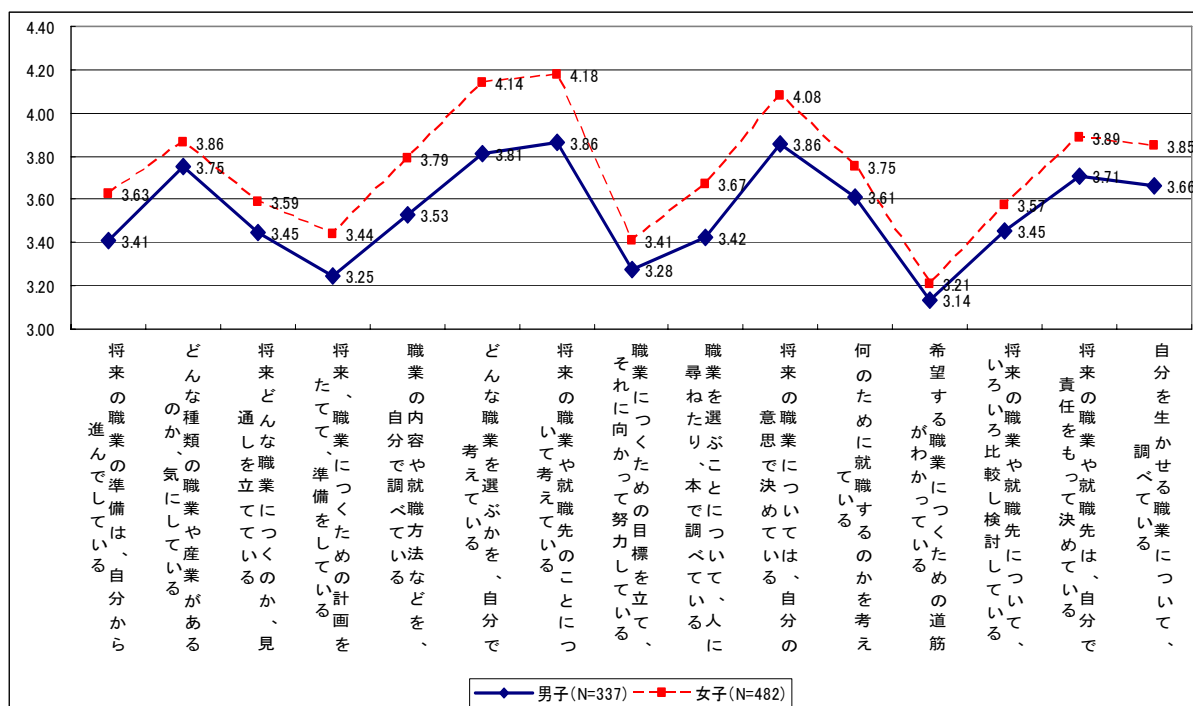
ほか、対象者の「性別」を分析項目とした。

III. 結果

III-1. 大学生の職業進路成熟傾向

まずは、調査対象者である大学生の職業進路成熟の傾向を概観しておこう。

図表1 大学生の職業進路成熟傾向



図表1は、職業進路成熟尺度15項目のスコアの平均値をそれぞれ性別に示したものである。

いずれの項目でも、女子が男子よりも平均値が高い結果が示されている。

しかし、どの項目の平均値が高く、どの項目の平均値が低いといったパターン傾向には、性差がみられなかった。具体的には、「将来の職業や就職先のことについて考えている（男子3.86、女子4.18）」「どんな職業を選ぶかを、自分で考えている（男子3.81、女子4.14）」などの平均値が高く示された。その一方、「希望する職業につくための道筋がわかっている（男子3.14、女子3.21）」「将来、職業につくための計画をたてて、準備をしている（男子3.25、女子3.44）」「職業につくための目標を立て、それに向かって努力している（男子3.28、女子3.41）」などの平均値は低い結果が示された。すなわち、本研究で調査対象となった大学生は、職業や就職先について考えてはいるものの、「希望進路への道筋を認知し、目標や計画をたて、準備や努力をする」といった点で、性別問わず、未成熟な状態にあるといえよう。

III-2. 小学校・中学校・高校での諸活動経験

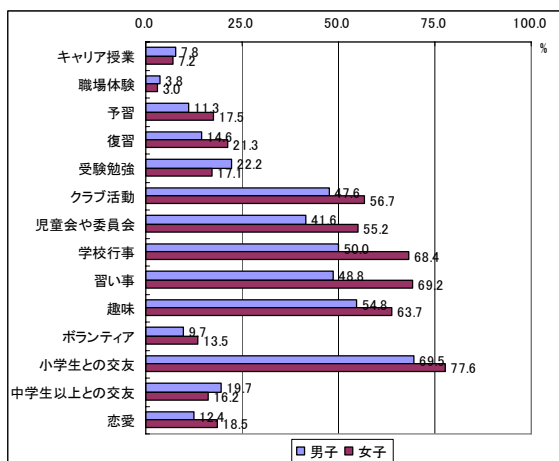
続いて、調査対象者である大学生の小学校・中学校・高校での諸活動経験について、「各学校段階での諸活動経験」「『キャリア教育』の経験率の推移」という側面からみていこう。

①各学校段階での活動経験

各学校段階での活動について、「4-かなり取り組んだ（経験した）」または「3-まあまあ取り組んだ（経験した）」と回答した者の比率（以降、「経験率」とする）⁶を性別にグラフ化したものが、図表2（小学校）、図表3（中学校）、図表4（高校）である。以下にて、性別問わず、学校段階ごとに経験率が高い活動についてみていく。

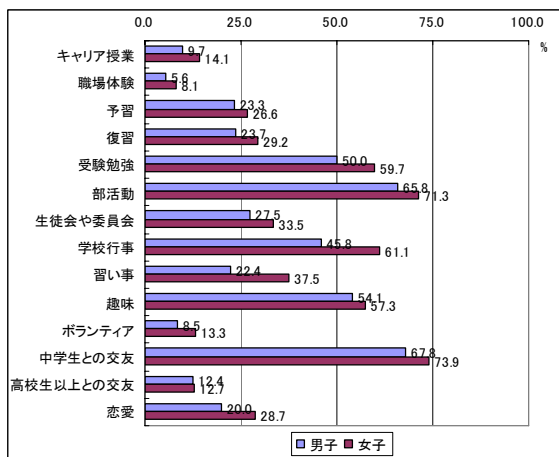
まず図表2より、小学校段階で、性別問わず50%以上の経験率を示した活動は、「小学生との交友（男子69.5%、女子77.6%）」「趣味（男子54.8%、女子63.7%）」「学校行事（男子50.0%、女子68.4%）」であった。

図表 2 小学校での活動経験率(「かなり」+「まあまあ」)



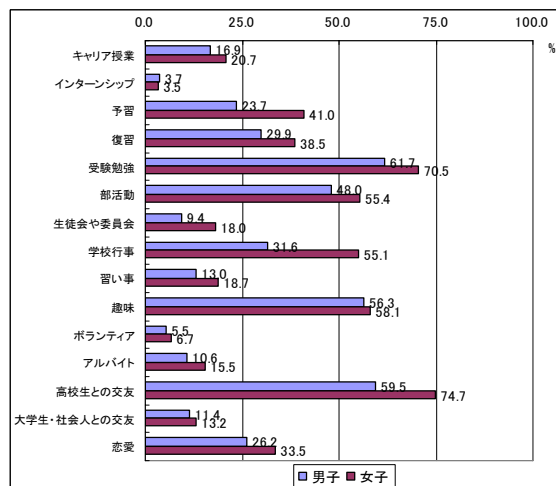
続いて図表 3 より、中学校では「中学生との交友(男子 67.8%, 女子 73.9%)」「部活動(男子 65.8%, 女子 71.3%)」「趣味(男子 54.1%, 女子 57.3%)」「受験勉強(男子 50.0%, 女子 59.7%)」の経験率が、性別問わず 50%以上であった。小学校段階に比べ、多くの中学生が高校受験を控えていたこともあり、「教科学習」への取り組みが目立つ結果となった。

図表 3 中学校での活動経験率(「かなり」+「まあまあ」)



さいごに図表 4 より、高校では「高校生との交友(男子 59.5%, 女子 74.7%)」「受験勉強(男子 61.7%, 女子 70.5%)」「趣味(男子 56.3%, 女子 58.1%)」の経験率が、性別問わず 50%以上に及んでいた。

図表 4 高校での活動経験率(「かなり」+「まあまあ」)



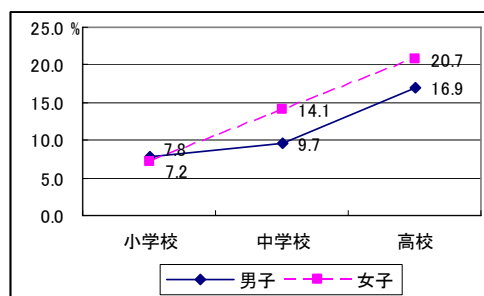
以上の結果、本研究の調査対象者は、いずれの段階でも「同じ学校段階の友人との交友」や「趣味」の経験が豊かであるとともに、調査対象者が大学生であるためか、中等教育段階では「受験勉強」の経験も豊かであることが確認された。

②「キャリア教育」の経験率の推移

さらに、「キャリア教育」の経験率に着目して、学校段階による推移をみていくこととする。

まず図表 5 は、「キャリア授業」の経験率の推移を性別に示したものである。

図表 5 「キャリア授業」経験率の推移



その結果、男子は小学校 7.8%, 中学校 9.7%, 高校 16.9%へと、女子は小学校 7.2%, 中学校 14.1%, 高校 20.7%へと推移しており、性別問わず、学校段階があがるほど「キャリア授業」の経験率も上昇する傾向が示された。

こうした背景には、彼らが過ごしてきた時代による、「キャリア教育」の位置づけや取り組みの違いが大きいであろう。

本研究の調査対象者が小学校での6年間を過ごしたのは、現役で大学に進学した学生であれば、1994年度から1999年度である。当時は、キャリア教育という文言すら政策文書にも登場しておらず、現在のような「キャリア教育」としての実践は、教育現場に導入されていない状況であったと思われる。しかし、7～8%の大学生が、「キャリア授業（仕事や職業に関する授業）」と記憶する活動をこの段階で経験していることは興味深い結果である。

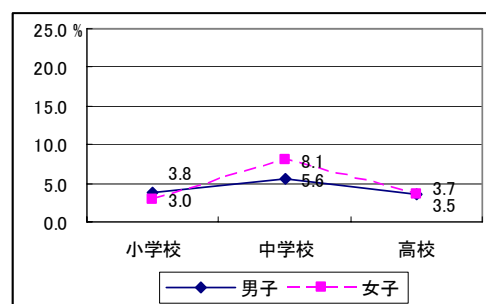
彼らが中学校での3年間を過ごしたのは、現役で大学に進学した学生であれば、2000年度から2002年度である。2002年に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」が設置され、教育改革の理念や方向性を示すとともに、教育課程の改善が促されていることより、当時は「キャリア教育」の導入初期であったといえるだろう。

彼らが高校での3年間を過ごしたのは、現役で大学に進学した学生であれば、2003年度から2005年度である。2004年度から「新キャリア教育プラン推進事業」として、2005年度から「キャリア教育実践プロジェクト」として、「キャリア教育」推進への具体的な取り組みが始まっている。また2002年に国立教育政策研究所より示された「職業観・教育観を育む学習プログラムの枠組み（例）」は、教育現場での「キャリア教育」の有益な指針となっていることより、当時は「キャリア教育」が実践的にも浸透し始めた時期であったといえよう。

以上のような「キャリア教育」への取り組みの推進が、大学生が過ごしてきた各学校段階での「キャリア授業」の経験率として反映されているものと思われる。

続いて、図表6は「インターンシップ（職場体験）」の経験率の推移を性別に示したものである。

図表6 「インターンシップ（職場体験）」
経験率の推移



その結果、全体的に経験率は高くはないものの、男子は、小学校3.8%、中学校5.6%、高校3.7%へと、女子は小学校3.0%、中学校8.1%、高校3.5%へと推移しており、小学校や高校段階に比べ、中学校段階での経験率の高さが目立つ傾向が示された。この傾向は女子の方が顕著である。

本研究の調査対象者が中学校での3年間を過ごしたのは、教育政策上の課題として、ボランティア活動・自然体験・職業体験といった体験活動の充実が強調された時期にあたる。兵庫県で1998年に「トライやるウィーク」として中学生による職場体験を実施して以来、主に中学校段階での「職場体験」が推進されており、図表6で示された中学校段階での「職場体験」の経験率の高さには、こうした影響が大きいものと思われる。

しかし、高校段階になると「インターンシップ」の経験率は低下している。キャリア教育等推進会議（2007）においても、高等学校普通科におけるインターンシップは、その導入割合に比べ、参加生徒数の割合が低いことが指摘されている。本研究の結果からも、大学生は、高校での「インターンシップ」経験が乏しいことが示された。

III-3. 大学生の職業進路成熟と小学校・中学校・高校での「キャリア教育」経験の豊かさの関連

本研究の調査対象者である大学生の職業進路成熟傾向および初等・中等教育段階での活動経験の豊かさが、以上のように確認されたところで、ここからは、本研究の第1の分析課題である「小学

校・中学校・高校の『キャリア教育』経験の豊かさは、大学生の職業進路成熟といかなる相関があるのかについてみていくこととする。

図表7は、小学校・中学校・高校での「キャリア教育」経験の豊かさ（4段階評価）と大学生の職業進路成熟15項目のスコア（5段階評価）の合計得点の相関分析を性別に行い、スピアマンの順位相関係数を示したものである。

**図表7 「キャリア教育」経験と
大学生の職業進路成熟の相関**

	男子	女子
小学校(キャリア授業)	.07	.13 *
小学校(職場体験)	.05	.11 *
中学校(キャリア授業)	.13 *	.21 ***
中学校(職場体験)	.03	.09 +
高校(キャリア授業)	.20 ***	.19 ***
高校(インターンシップ)	.07	.11 *

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,+p<.10

その結果、男子に関しては、「高校(キャリア授業) ($\rho = .20, p < .001$)」や「中学(キャリア授業) ($\rho = .13, p < .05$)」の経験の豊かさが、職業進路成熟と有意な正の相関となった。その一方、いずれの学校段階での「インターンシップ(職場体験)」経験の豊かさも、男子の職業進路成熟との相関はみられない結果が示されている。

他方、女子に関しては、男子同様、「中学校(キャリア授業) ($\rho = .21, p < .001$)」や「高校(キャリア授業) ($\rho = .19, p < .001$)」の経験の豊かさが、職業進路成熟と顕著に有意な正の相関を示したのみならず、いずれの学校段階のいずれの活動経験の豊かさとも、有意に正の相関が示された。

初等・中等教育段階の「キャリア教育」、中でも「インターンシップ(職場体験)」経験の豊かさが、大学生の職業進路成熟に与える影響力には性差がみられ、男子に関しては、両者に有意な相関がみられないという点は着目すべき知見であろう。鈴木(2008: 85)が「学校のもつ管理的風土においてボランティアは強制的な『奉仕』になってしまう」と指摘するように、生徒の自発性が伴わなければ、学校における体験活動は、強制的な「奉仕」

になりかねない。本研究の結果から、男子に対しては、ボランティア同様の強制力が、「インターンシップ(職場体験)」において働いた可能性も考えられる。

III-4. 大学生の職業進路成熟と関連する小学校・中学校・高校での活動類型

では、初等・中等教育段階でのいかなる活動経験の豊かさが、大学生、とりわけ男子大学生の職業進路成熟と関連しているのだろうか。

以下にて、本研究の第2の分析課題である「小学校・中学校・高校における諸活動経験の豊かさは、大学生の職業進路成熟といかなる関連があるのか」という点についてみていくこととする。

まずは「大学生の職業進路成熟と関連する小学校・中学校・高校での活動経験の豊かさ」について、「活動類型」という切り口から概観していこう。

図表8は、「キャリア教育」「教科学習」「特別活動」「課外活動」「交友活動」の5つの類型ごとに、小学校・中学校・高校での活動経験の豊かさ（4段階評価）の合計スコアと大学生の職業進路成熟15項目のスコア（5段階評価）の合計得点の相関分析を性別に行い、スピアマンの順位相関係数を示したものである。

**図表8 大学生の職業進路成熟と
活動類型ごとの経験の豊かさの相関**

	小学校		中学校		高校	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
「キャリア教育」	.05	.16 **	.11 +	.19 ***	.20 ***	.21 ***
教科学習	.15 **	.17 ***	.30 ***	.23 ***	.32 ***	.26 ***
特別活動	.28 ***	.25 ***	.22 ***	.22 ***	.24 ***	.19 ***
課外活動	.25 ***	.21 ***	.11 *	.19 ***	.13 *	.08
交友活動	.15 **	.17 ***	.16 **	.23 ***	.24 ***	.26 ***

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,+p<.10

その結果、性別問わず、いずれの学校段階でも大方の活動類型の経験の豊かさと大学生の職業進路成熟との相関が有意に示された。

中でも、男子は、初等教育段階での「特別活動 ($\rho = .28, p < .001$)」「課外活動 ($\rho = .25, p < .001$)」

や、中等教育段階での「教科学習（中学校 $\rho = .30, p < .001$, 高校 $\rho = .32, p < .001$ ）」の経験の豊かさとの相関が、他の活動類型に比べて強く示されている。

他方、女子は、初等教育段階での「特別活動（ $\rho = .25, p < .001$ ）」や中等教育段階での「教科学習（中学校 $\rho = .23, p < .001$, 高校 $\rho = .26, p < .001$ ）」の経験の豊かさとの相関が、男子同様、強く示された以外に、「交友活動（中学校 $\rho = .23, p < .001$, 高校 $\rho = .26, p < .001$ ）」の経験の豊かさとの相関が、他の活動類型に比べて強く示されている。先の分析において、「キャリア教育」の経験の豊かさとの相関が示されたが（図表 7 参照）、図表 8 からは、それ以上に、初等教育段階での「特別活動」や中等教育段階での「教科学習」「交友活動」の活動経験の豊かさは、強い相関があることが明らかになった。

III-5. 大学生の職業進路成熟に影響のある活動

では、具体的にいかなる活動の経験の豊かさが、大学生の職業進路成熟に影響するのだろうか。

以下にて、「小学校から高校までを通して、大学生の職業進路成熟に影響のある活動は、どのような活動なのか」さらには「小学校・中学校・高校の段階ごとにみると、大学生の職業進路成熟に影響のある活動は、どのような活動なのか」といった 2 つの側面からみていくこととする。

① 小学校から高校までを通して、大学生の職業進路成熟に影響のある活動

まずは、「小学校から高校までを通して、大学生の職業進路成熟に影響のある活動は、どのような活動なのか」という点について、性別にみていく。

小学校から高校までを通して、大学生の職業進路成熟に影響を与えている活動について、ステップワイズ法（有意水準 5%未満）による重回帰分析を性別に行った結果が、図表 9（男子）および

図表 10（女子）である。

図表 9 職業進路成熟に影響する活動（男子）

	β
高校(予習)	.21 **
小学校(学校行事)	.15 *
小学校(習い事)	.19 **
高校(高校生との交友)	.12 *
中学校(復習)	.16 *
中学校(習い事)	-.15 *
R ²	.24 ***

***; p < .001, **; p < .01, *; p < .05

図表 10 職業進路成熟に影響する活動（女子）

	β
中学校(キャリア授業)	.18 **
高校(受験勉強)	.17 ***
小学校(受験勉強)	.14 **
小学校(習い事)	.14 **
高校(恋愛)	.25 ***
中学校(職場体験)	.12 *
R ²	.26 ***

***; p < .001, **; p < .01, *; p < .05

その結果を、5 つの活動類型ごとにみていくこととする。

まず「キャリア教育」では、男子の職業進路成熟に対して、いずれの学校段階の「キャリア教育」の影響も示されず、女子に対してのみ、中学校での「キャリア授業（ $\beta = .18, p < .01$ ）」「職場体験（ $\beta = .12, p < .05$ ）」の影響が有意に示された。

「教科学習」では、男子の職業進路成熟に対して、中学校での「復習（ $\beta = .16, p < .05$ ）」や高校での「予習（ $\beta = .21, p < .01$ ）」の影響が、女子に対しては、高校および小学校での「受験勉強（高校 $\beta = .17, p < .001$, 小学校 $\beta = .14, p < .01$ ）」の影響が有意に示された。この結果より、「教科学習」という同一の活動類型の中でも、大学生の職業進路成熟に影響のある具体的な活動には性差があり、男子は「日常的な教科学習」、女子は「将来の進路（進学）に向けての教科学習」である傾向がみられた。

「特別活動」では、男子の職業進路成熟に対してのみ、小学校での「学校行事（ $\beta = .15, p < .05$ ）」

の影響力が有意に示されている。

「課外活動」では、性別問わず、大学生の職業進路成熟に対して、小学校での「習い事 (男子 $\beta = .19, p < .01$, 女子 $\beta = .14, p < .01$)」の影響力が有意に示された。しかし、男子に対しては、中学校での「習い事 ($\beta = -.15, p < .05$)」がマイナスの影響力を及ぼすことも示されている。本研究のみでは、その要因について言及することはできないが、今後、この点に関して、さらなる調査分析が必要であろう。

さいごに「交友活動」では、男子の職業進路成熟に対して、高校での「高校生との交友 ($\beta = .12, p < .01$)」の影響力が、女子に対しては、高校での「恋愛 ($\beta = .25, p < .001$)」の影響力が有意に示されている。村田 (1997) によれば、仲間との相互的な情緒的支持は、青年が自分や外界についての知識を吸収する機会を与えるという点でも、彼らの社会化を進めてゆくために役立つという。男子は「同じ学校段階の友人との交友」、女子は「恋愛」という形で、相互的な情緒的支持の影響力が示されたのではなかろうか。

以上の結果から、活動類型のみならず、具体的な活動にも目を向けると、女子大学生の職業進路成熟に対しては、初等・中等教育段階での「将来」の職業や進学にかかわる活動が影響するのに対し、男子大学生の職業進路成熟には、「将来」よりも「現在 (日常)」にかかわる活動が影響する傾向が示唆された。

②小学校・中学校・高校の段階ごとの、大学生の職業進路成熟に影響のある活動

さらに、「小学校・中学校・高校の段階ごとにみると、大学生の職業進路成熟に影響のある活動は、どのような活動なのか」という側面についてもみていこう。

図表 11 は、大学生の職業進路成熟に対する各段階での諸活動経験の影響について、強制投入法による重回帰分析を性別に行った結果である⁷。

図表 11 大学生の職業進路成熟に対する各学校段階での諸活動経験の影響

		小学校		中学校		高校	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
		β	β	β	β	β	β
キャリア教育	キャリア授業	-.05	.07	.06	.04	.07	.11 *
	インターンシップ(職場体験)	-.07	.05	-.10	.06	-.07	.03
教科学習	予習	.08	-.05	.00	-.05	.18 *	.01
	復習	.03	.11	.20 *	.20 **	.04	.05
	受験勉強	.04	.09	.03	.09 +	.11 +	.15 **
特別活動	部活動(クラブ活動)	.13 +	.00	.08	.06	.07	.07
	生徒会(児童会)や委員会	.06	-.02	.03	-.09	.02	-.07
	学校行事	.20 *	.14 +	.10	.06	.10	.06
課外活動	習い事	.18 **	.16 **	-.03	.04	-.04	.00
	趣味	-.01	-.04	-.03	.06	-.01	-.02
	ボランティア	-.09	.06	.01	.06	-.01	.07
	アルバイト					-.02	.01
交友活動	同じ学校段階の友人との交友	-.05	.09	.07	-.05	.11 +	.07
	上級学校段階の友人との交友	.04	.05	.01	.10 *	.08	.01
	恋愛	.00	.13 *	.05	.18 ***	.02	.17 ***
R ²		.16 ***	.15 ***	.12 ***	.18 ***	.19 ***	.18 ***

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, +:p<.10

まずは、小学校段階についてみていこう。

三村 (2006)によれば、キャリア教育を導入する際、小学校の現場が直面する主な疑問の1つとして、「自分たちがやろうとしているものがキャリア教育にあたるのか」という点があるという。

しかし、図表 11 の結果から、日本の小学校がかねてより有する教育資源を活用した諸活動の影響力が、長期的なスパンからみても大方明らかになった。とりわけ、「特別活動」の中でも長い歴史をもち、主要領域ともいえる「学校行事」経験の影響力は、性別問わず有意に示されている(男子 $\beta = .20, p < .05$, 女子 $\beta = .14, p < .10$)。鈴木 (2008: 81)によれば、学校行事には、子どもたちの総合的体験的な活動、全校や学年全体の集団的活動、学校生活が単調とならないための節目や変化をもたらす活動、子どもの参加協力と自主的な活動という特徴があるという。学校行事の企画・立案、参加をめぐる話し合いなどは、思いがけない事態やトラブルへの対処を含め、いずれも実践的な課題に即したものであり、大学生になった際の職業進路成熟に対しても、その経験の影響が顕著に示されたのではなかろうか。

なお、「習い事 (学習塾除く)」経験も、性別問わず明らかに有意な影響力が示された(男子 $\beta = .18, p < .01$, 女子 $\beta = .16, p < .01$)。本研究からのみでは、その要因を論ずることはできないが、その背景には、家庭環境の影響が少なからずあるものと推測される。

ほか、「クラブ活動」経験は男子にのみ ($\beta = .13, p < .10$)、「恋愛」経験は女子にのみ ($\beta = .13, p < .05$)、有意な影響力が示されるなど、性差がみられる活動もみられた。

続いて、中学校段階についてみていこう。

小学校段階に比べると、中学校での活動経験の影響力には、明らかな性差が示された。

「復習」経験は、性別問わず有意な影響力が示されたが(男子 $\beta = .20, p < .05$, 女子 $\beta = .20, p < .01$)、「恋愛 ($\beta = .18, p < .001$)」「上級学校段階 (高校生以上)の友人との交友 (β

$= .10, p < .05$)」「受験勉強 ($\beta = .09, p < .10$)」の経験は、女子にのみ有意な影響力が示されている。

女子の「恋愛」は、相手が自分よりも年長者となる可能性が高いだろう。「上級学校段階 (高校生以上)の友人との交友」の影響力も示されていることより、「年長者との交友」経験が、将来についての知識や、将来を考える機会を彼女らに与えたのではないかと思われる。

これに対し、男子に有意な影響力が示されたのは、女子にも影響力が示された「復習」経験のみであった。男子に対して、中学校での諸活動経験の影響力が全体的に弱いという結果は、中学校でのキャリア教育のあり方を検討する上で、興味深い知見である。

さいごに、高校段階についてみていこう。

中学校段階同様、高校での活動経験の影響力にも性差が示された。ただし、中学校段階と異なるのは、男子にのみ有意な影響力をもつ活動も示されたという点である。「予習 ($\beta = .18, p < .05$)」や「同じ学校段階 (高校生)の友人との交友 ($\beta = .11, p < .10$)」の経験は、男子にのみ有意な影響力が示された活動である。

これに対し、女子にのみ有意な影響力を示したのは、「恋愛 ($\beta = .17, p < .001$)」や「キャリア授業 ($\beta = .11, p < .05$)」の経験であった。

図表 1 から、女子の方が男子よりも、将来の進路や職業への関心が強いものと思われるが、こうした彼女らの関心との関連が明確な「キャリア授業」経験の影響力が有意に示されたのではなかろうか。

ここで着目すべき点は、「受験勉強」経験の豊かさが、性別問わず有意な影響力を示している点である(男子 $\beta = .11, p < .10$, 女子 $\beta = .15, p < .01$)。大学進学を志望する高校生が、上級学校進学を目指す者として、「受験勉強」に真摯に取り組んだ経験が豊かであることは、大学生になった際の職業進路成熟にも影響しているものと思われる。

IV. 考察

以上の結果をふまえ、教育現場に対するインプリケーションをまとめ、その背景にある理論的な検討を行うための仮説を提示することとする。

まずは、大学生の職業進路成熟に寄与する活動が、「キャリア教育」として新たにカリキュラム化・プログラム化された活動以外にも、学校の教育資源を活かした活動の中で、さまざまな学校段階に存在しているという点である。

本研究の結果、全般的に、初等・中等教育段階の活動経験が豊かな大学生ほど、職業進路成熟は高いことが示された（図表 8 参照）。中でも初等教育段階での「特別活動」や中等教育段階での「教科活動」との関連が他の活動類型に比べて強く示されたことより、日本の学校教育がかねてより有する教育資源を活用した広義のキャリア教育の経験が、大学生の職業進路成熟に少なからず影響することが明らかになった。

さらに、学校段階ごとに大学生の職業進路成熟への影響力がある活動について目を向けた結果、「小学校での学校行事」「中学校での復習」「高校での受験勉強」が、性別問わず、影響力のある活動として具体的に示された（図表 11 参照）。

小学校では、「進路指導」という概念さえ十分に成立しておらず、政策的にキャリア教育の推進を要請されても困惑が隠せない状況にあるといわれている。こうした状況の中、「小学校での学校行事」は、キャリア教育の視点から見直すべき活動としてすでに着目されているが、本研究の結果、大学生にとって経験豊かな活動でもあることが示されたことにより（図表 2）、キャリア教育の視点から見直した際の影響力の大きさが期待できる。

続いて、中等教育段階における「教科学習」への取り組み姿勢と、大学生の職業進路成熟は相関関係にあるという点である。

先にも述べたように、大学生の職業進路成熟に対して、中等教育段階での「教科学習」経験の豊かさが影響が実証的に示されたという点は、特筆すべき点である。本研究では、これまでも目が

向けられてきた「教科学習の内容」ではなく、「教科学習への取り組み姿勢」との関連に目を向けた結果、「教科学習（学力養成）」と「キャリア教育（キャリア形成）」は相反するものではなく、むしろ相関関係にあることが示唆された。

中でも、「中学校での復習」および「高校での受験勉強」は、キャリア教育の視点からも見直すべき活動であると思われる。

中学校での「復習」経験の豊かさは、職業進路成熟が女子に比べて未熟な男子に対して（図表 1 参照）、中学校での諸活動の中で、唯一影響力を示した活動であり（図表 11 参照）、小学校から高校までを通してその影響力が明らかに示された活動でもある（図表 9 参照）。こうした点から、とりわけ男子に対して、中学校での「復習」は、キャリア教育としての視点から見直していくべき活動であるといえよう。

また、高校での「受験勉強」は、性別問わず大学生にとって経験豊かな活動でもあり（図表 4 参照）、そのあり方を見直した際に、大学生の職業進路成熟に及ぼす影響力は大きいだろう。

1980 年代より「受験指導」に対する批判が強まり、1990 年代以降、欧米の新自由主義を背景に、学校教育全体の組織的な課題として、自己の個性・価値観を重視し、「主体的な進路選択」を援助する活動へと転換が図られている。しかし、本研究の結果、大学進学を志望する高校生の「受験勉強」経験の豊かさ（図表 11 参照）や、女子に関しては、小学生の「受験勉強」経験の豊かさ（図表 10 参照）が、大学生になった際の職業進路成熟に影響することが示された。「受験勉強」のいかなる側面が、大学生の職業進路成熟に影響するのかについては、さらなる検討が必要であるが、「受験勉強」のその側面への働きかけとして、「受験指導」が機能するのであれば、「受験指導」も有益なキャリア教育となりうるのではなかろうか。

さいごに、大学生の職業進路成熟に影響する活動の「性差」についてである。

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（2004）では、「キャリア」を「個々

人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義している。しかし、「キャリア教育」として取り組まれている実践の多くは、将来の職業や仕事の理解・選択という観点が強すぎるものが少なからず指摘されるように（たとえば新井 2008）、「自己と働くこととの関係付けや価値付け」に力点が偏っているように思われる。

たしかに、早期の段階から、将来の職業や仕事への視点を持たせることには一定の意義があるだろう。本研究の結果からも、女子に対しては、こうした働きかけが、大学生になった際の職業進路成熟に有益であることが示されている（図表 10 および 11 参照）。しかし、男子の職業進路成熟に対しては、初等・中等教育段階の「キャリア教育」、中でも「インターンシップ（職場体験）」経験の影響力は示されておらず（図表 7 参照）、こうした働きかけよりも、日本の学校教育がかねてより有する教育資源を活用した「現在（日常）」にかかわる活動の影響力が強く示された（図表 9 および 11 参照）。こうした性差傾向を意識し、男子に対するキャリア教育は、現在の彼らがおかれた状況（日常）との接続を図ることが重要であると思われる。

V. おわりに

労働政策研究・研修機構（2008: 5）で述べているように、日本の学校段階のキャリア形成支援の理論的基盤の実証的な検証は、先進諸国のキャリア形成支援施策に共通した課題として継続的に行う必要があり、経験上良いとされているキャリア形成支援が、どの程度、どのような対象層に、どのような点で良いのかということ、客観的・実証的なデータで具体的に示す必要がある。本研究では、広義のキャリア教育の実証的な検証として、初等・中等教育段階での活動経験が大学生の職業進路成熟に及ぼす影響について、長期的なスパンで明らかにすることを試みた。その結果、日本の学校段階のキャリア教育研究や実践において、今

後、着眼していくべき点を浮かび上がらせることができた。

しかし、本研究には多くの限界もあり、課題も少なからず残されている。

第 1 に、「回想による逆行調査の限界」という点である。本研究では「大学生による回想」という逆行調査方法をとらざるをえなかったため、結果の解釈には限界がある。今後、インタビュー調査等により根拠のある回想としていくことや、順行追跡調査による裏づけを行うことにより、本研究の知見を仮説とし、「なぜ、その活動経験が、大学生の職業進路成熟に影響力を持つのか」といった点についても、さらなる検証を試みたい。

第 2 に、「初等教育段階での『キャリア教育』の影響は、現在の大学生からではみえにくい」という点である。初等教育段階から「キャリア教育」を受けてきた世代が大学生になる時期に同様の調査を行い、本研究の知見との比較検討をしていきたい。そのための比較データとしても、本研究の知見は意義があるものと思われる。

第 3 に、「大学での活動経験の影響を本研究では捉えていない」という点である。大学生の職業進路成熟に対し、大学入学後に経験した諸活動の影響が少なからずあることは言うまでもない。今後、大学 4 年生を対象に、就職活動中のキャリア教育・支援経験を含めて、大学入学後の諸活動経験の影響力についても明らかにしたい。その際には、本研究では捉えきれない「小学校→中学校→高校→大学」というパスを通じた経験の影響についても言及したいと考えている。

第 4 に、「大学生の職業進路成熟に影響を及ぼしうる他の要因について言及していない」という点である。学校は社会化学習の大きな供給源であるが、家庭が彼らの職業的社会化において、その態度や価値観の基礎を形成する主たるエージェントであることは言うまでもない。本研究においても、家庭環境に大きく左右されるであろう「小学校段階の習い事」の経験の豊かさが、性別問わず大学生の職業進路成熟に強く影響することが明らかになっている。今後、こうした側面も含め、よ

り多面的な側面から進路成熟の形成要因について捉えた上で、学校教育の意義や影響について、再度、改めて確認していきたい。

いずれの課題についても、今後、より理論的に検討していかねばなるまい。進路成熟、ひいてはキャリア発達理論の学習を深め、より理論的な検討を実証的な調査分析に加えていくこととしたい。

多くの課題が残されているが、本研究をふまえ、今後も、教育現場の実践を支える理論的基盤や実証研究を蓄積することにより、青少年のキャリア形成に対して、真に寄与するキャリア教育のあり方を検討していきたいと考えている。

注

¹ 坂口 (1995: 7) によれば、レディネス (readiness) は教育準備性と訳される。学習者がある課題を達成する際に、本人のこれまでの身体的・運動的・情緒的・社会的な成熟の一定規定の水準が満たされていなかったり、あるいは、学習するための知識・技能・興味・態度などの必要条件が準備されていないと、周囲からの外的な作用が強く影響しても習得されないことを意味している。

² データクリーニング時に住所や氏名によって同一人物や同一世帯者の二重回答の排除を行っている。また、「回答時間が極端に短い」「すべて同じ選択肢で回答」「規則的に選択肢を選択」など、不正回答者も調査対象から排除している。

³ 留学生や社会人経験者は除く。

⁴ 筆者が複数の大学で担当する授業の受講生 80 名に対し、「これまでの学校生活の中で、どのような活動を経験したか」に関する自由記述回答を求めた。

⁵ 中高生を主たる対象とした尺度であるが、ネット調査の性格 (必要最低限な項目数等) に最も適合する尺度として、本研究でも用いることとした。大学生を対象とした際の信頼性等については、別途、検証結果を示すこととする。

⁶ 「覚えていない」と回答した者は、そのように回答した項目の分析対象から外している。

⁷ いずれも多重共線性の可能性については確認済みである。

参考文献

- 新井立夫, 2008, 「高校での実践から小学校のキャリア教育に望むもの」『児童心理—小学校からのキャリア教育』NO. 873, 金子書房, 157-163。
- 東清和, 2003, 「現代青年の進路意識の発達」東清和・安達智子編著『大学生の職業意識の発達—最近の調査データの分析から』学文社, 111-132。
- Crites, J. O., 1973, *Career Maturity Inventory: Theory & research handbook*. McGraw-Hill.
- 荻谷剛彦, 1991, 『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会。
- 児美川孝一郎, 2007, 『権利としてのキャリア教育』明石書店。
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議, 2004, 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/01/04012801/002/010.pdf, 2009. 2. 21)
- キャリア教育等推進会議, 2007, 「キャリア教育等推進プラン」

- (<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/career/s.pdf>, 2009. 2. 21)。
- 国立教育政策研究所, 2008, 「平成 19 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果 (概要)」(<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/20i-ship/i-ship20.pdf>, 2009. 2. 21)。
- 松高政, 2008, 「大学の教育力としてのキャリア教育—京都産業大学におけるパネル調査分析から—」『京都産業大学論集社会科学系列』25 : 145-167。
- 三村隆男, 2006, 「小学校でキャリア教育を進めるための基礎的理解」児島邦宏・三村隆男編『小学校・キャリア教育のキュラムと展開案』明治図書, 14-19。
- , 2008, 「小学校のキャリア教育をどう考えるか—教育活動を見直す視点」『児童心理—小学校からのキャリア教育』NO. 873, 金子書房, 2-11。
- 望月由起, 2007, 『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪—高校進路指導の社会学』東信堂。
- 村田孝治, 1997, 『生涯発達—生活心理学的アプローチ』培風館。
- 那須光章, 1992, 「高校生の進路成熟の要因に関する研究(1)」『滋賀大学教育学部紀要(人文科学・社会科学・教育学)』42:77-90。
- 労働政策研究・研修機構, 2008, 『学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達—キャリア教育との連携に向けて』労働政策研究報告書No.104。
- 鈴木康裕, 2008, 「学校行事と特別活動」折出健二『特別活動』学文社, 77-92。
- 坂口哲司, 1995, 「発達の概念」坂口哲司編著『生涯発達心理学』ナカニシヤ出版, 5-25。
- 坂柳恒夫, 1991, 「進路成熟の測定と研究課題」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』15 : 269-80。
- , 1992, 「中学生の進路成熟に関する縦断的研究」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』16 : 299-308。
- , 1993, 「高校生の進路成熟に関する縦断的研究」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』17 : 127-36。
- 杉山成, 2007, 「アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか」『小樽商科大学人文研究』113 : 87-98。
- Super, D. E., 1984, Career & life development. in Brown, D. & Brooks, L. (eds.) *Career Choice & Development*. Jossey-Bass.
- 竹内登規夫・坂柳恒夫, 1977, 「児童の進路成熟に関する多次元分析」『進路指導』59 (12) : 14-20。
- 渡部昌平, 2007, 『誰でもできる簡単キャリア教育』雇用問題研究会。